

3.2 河川に生息する生物の確認状況（河川の自然度・健全度）

ここでは河川に特有な環境に生育する群落の確認状況の整理等を行いました。なお、前回、前々回調査との比較は、調査の範囲や時期、回数などの条件が必ずしも同一ではありません。また、限られた季節や場所にしかみられない種もあることから、比較結果は同一河川での消長を示すものではなく、傾向を把握するための参考です。

【河川敷の変遷】

(植物調査)

- 32 河川中 24 河川で樹林化の傾向

植生図作成調査の結果もとに、河川敷を木本群落、草本群落、自然裸地、その他、開放水面の 5 つに区分し、河川敷の状況の変遷について整理しました。

今回とりまとめを行った 32 河川の平均では、河川敷は面積にしておよそ木本群落 16%、草本群落 21%、自然裸地 7%、その他 22%、開放水面 34%で占められていました。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、河川敷で木本群落の占める割合が増加する、樹林化の傾向がみられたのは、24 河川でした。（資料掲載: 3-15～3-20 ページ）

近年、河川敷において植生が著しく繁茂する樹林化の現象が進み、河川管理上の懸案事項となっている箇所が少なくありません。

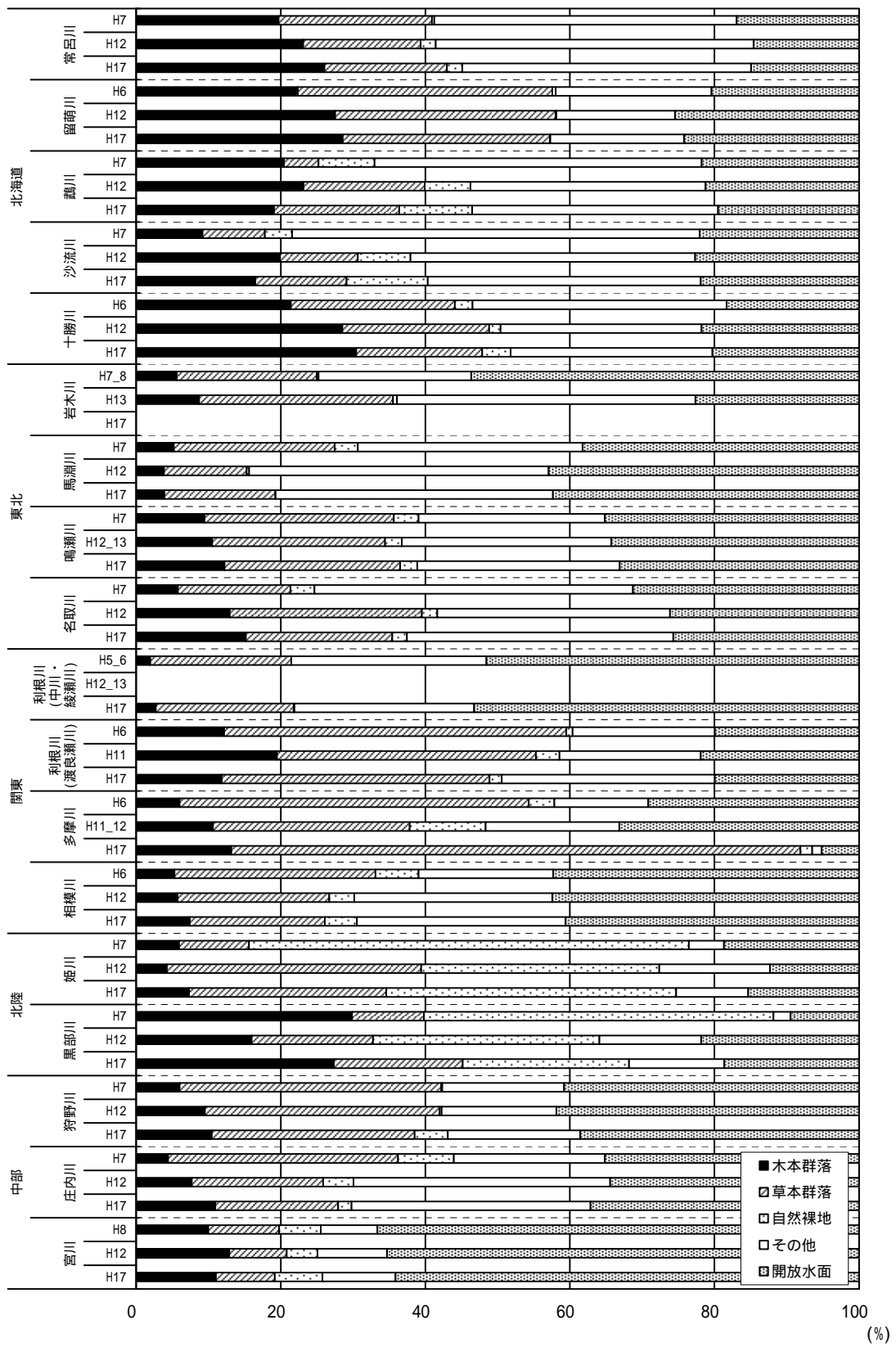
ここでは、植生図作成調査の結果をもとに、河川区域を木本群落、草本群落、自然裸地、その他（畑、水田、人工草地、人工裸地、公園・グラウンド等）、開放水面の 5 つに区分し、河川敷の状況の変遷について整理しました。

今回とりまとめを行った 32 河川の平均では、調査対象面積 はおよそ木本群落 16%、草本群落 21%、自然裸地 7%、その他 22%、開放水面 34%で占められていました。

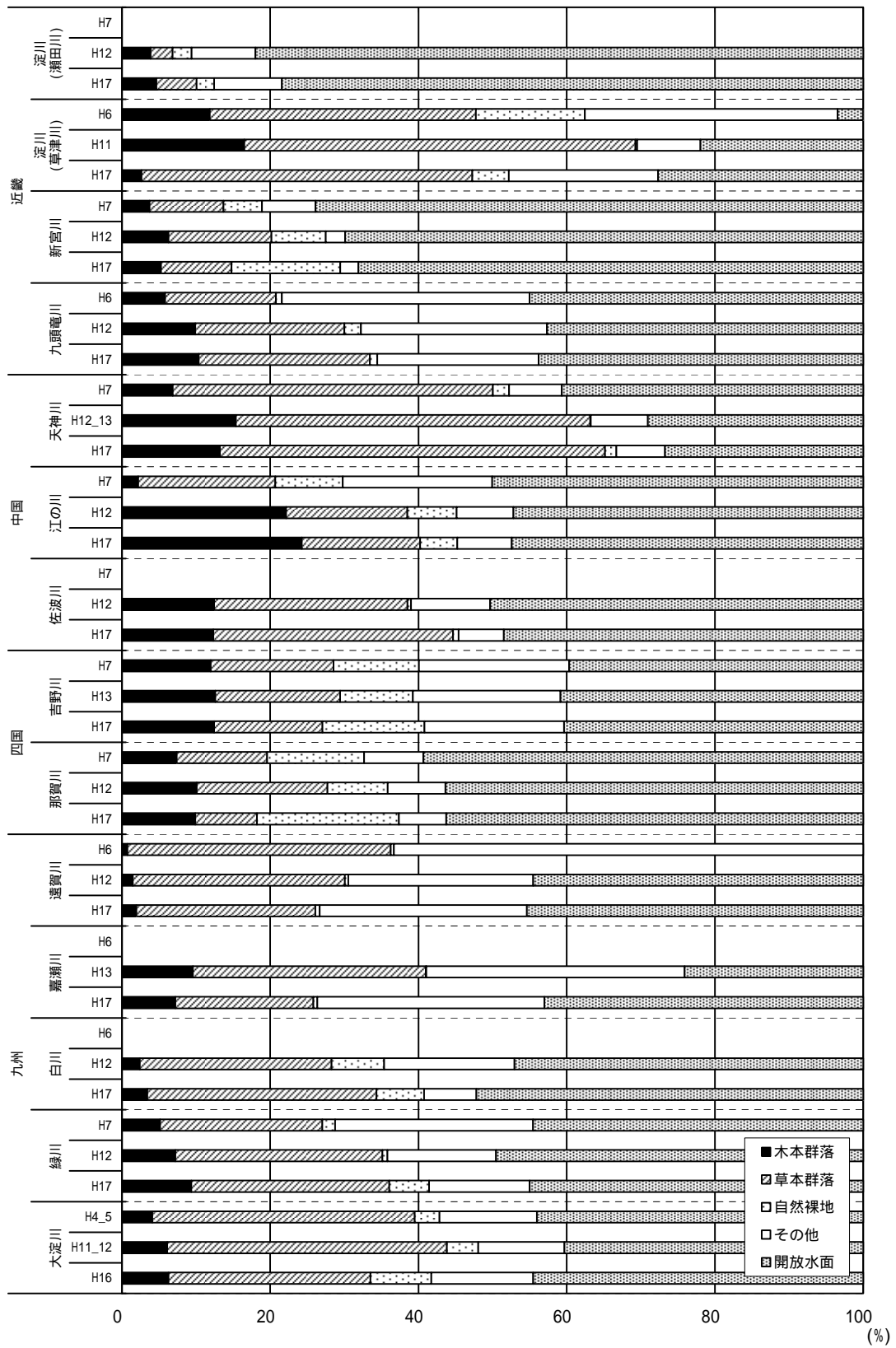
前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、木本群落の占める割合が増加する、樹林化の傾向がみられたのは、北海道地方の鶴川、東北地方の馬淵川などを除く 24 河川でした。

：調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前々回調査から今回調査にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲（距離）の調整を図っている。

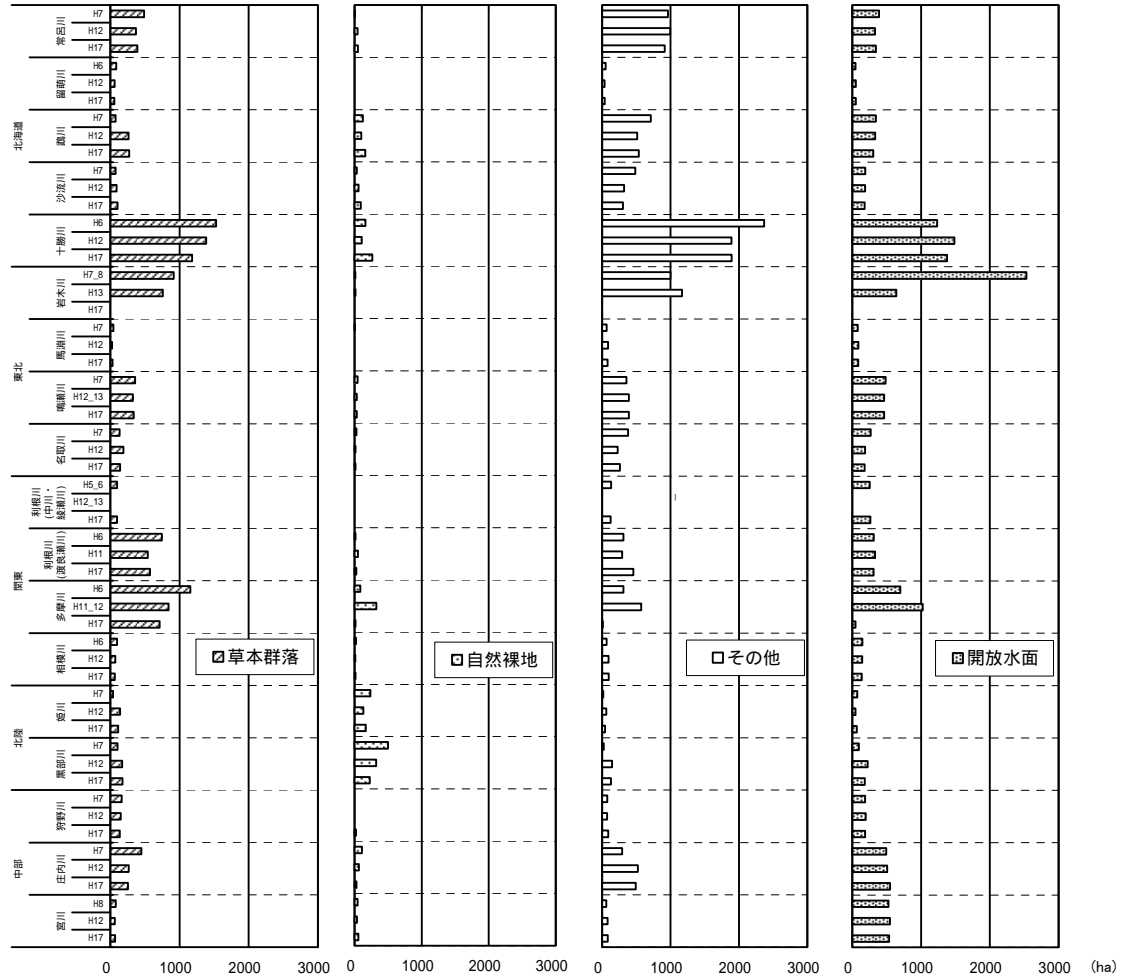
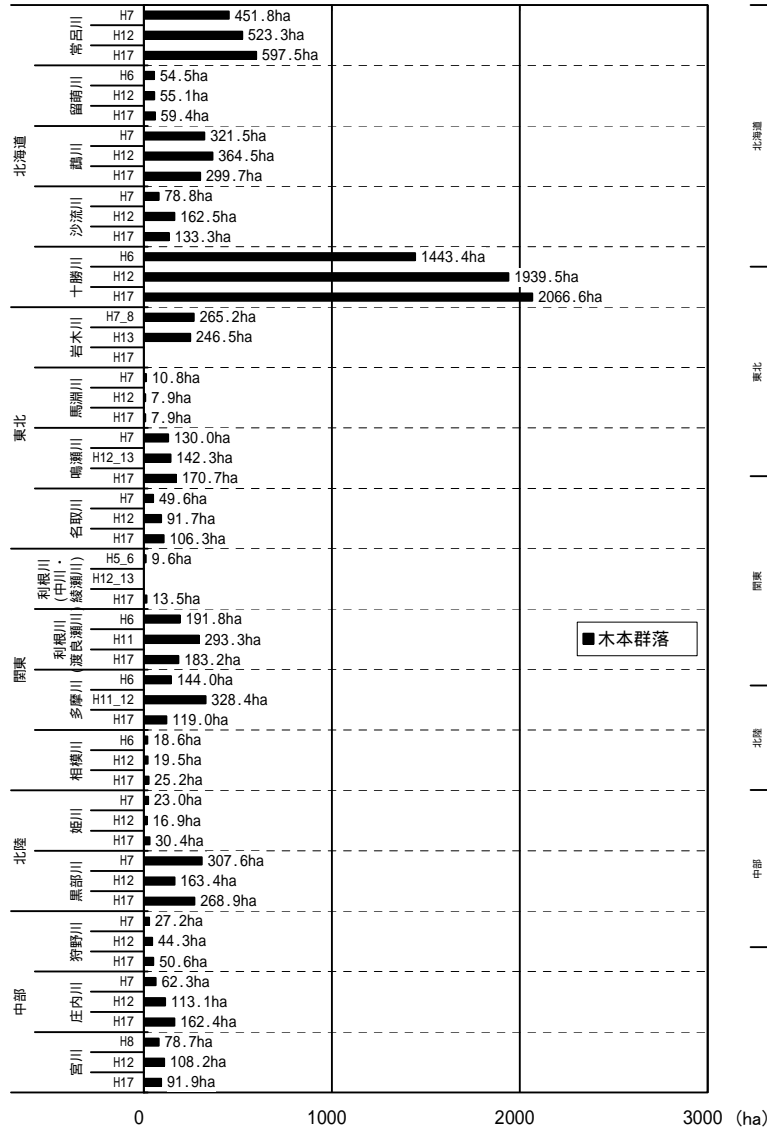
白川（H6）には、開放水面の面積を示すデータがなかった。



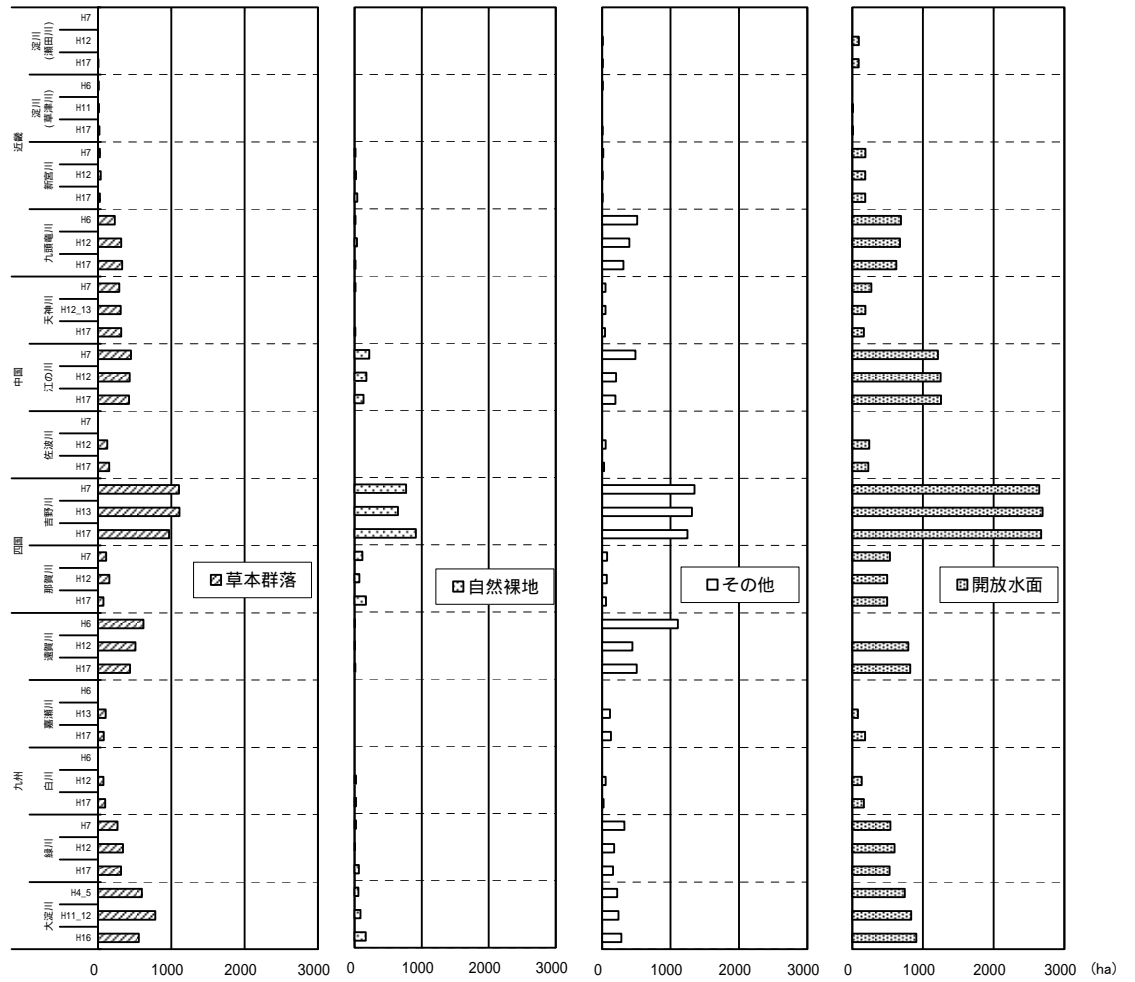
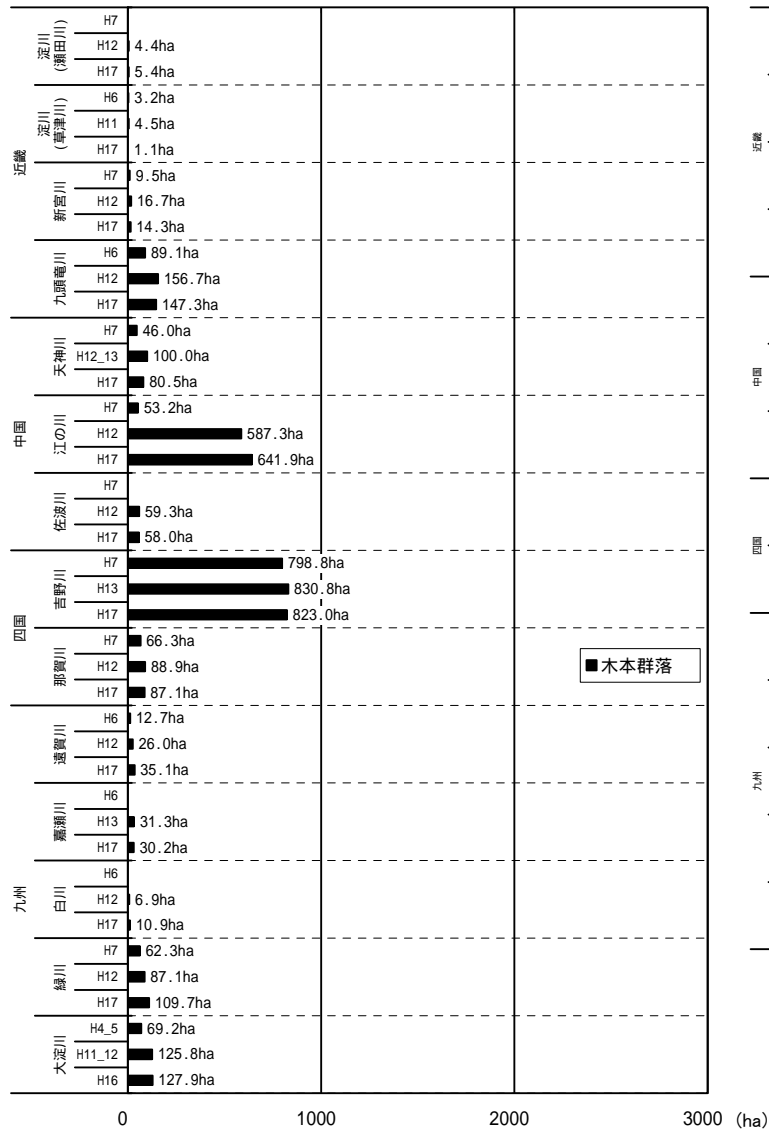
河川敷の変遷（調査対象面積に対する構成比）



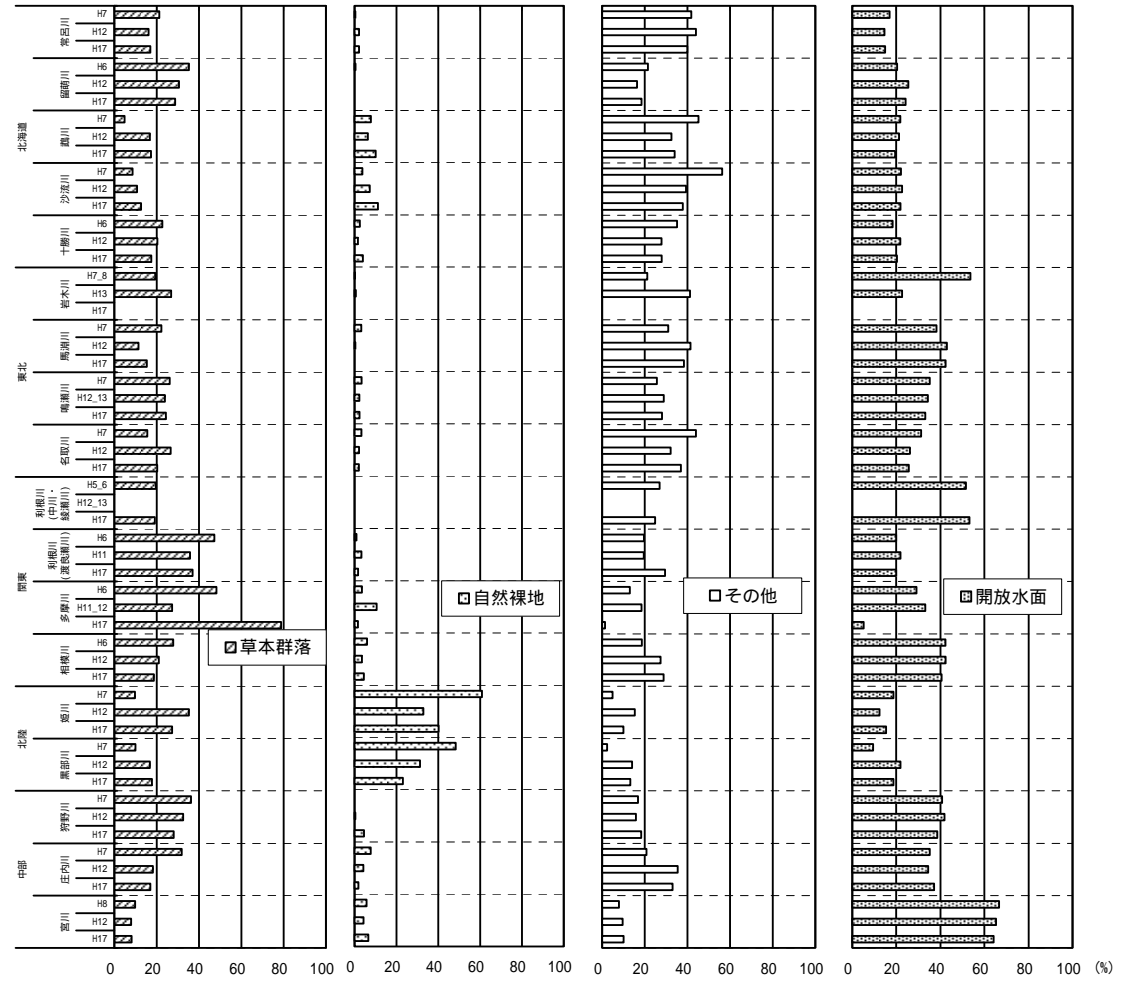
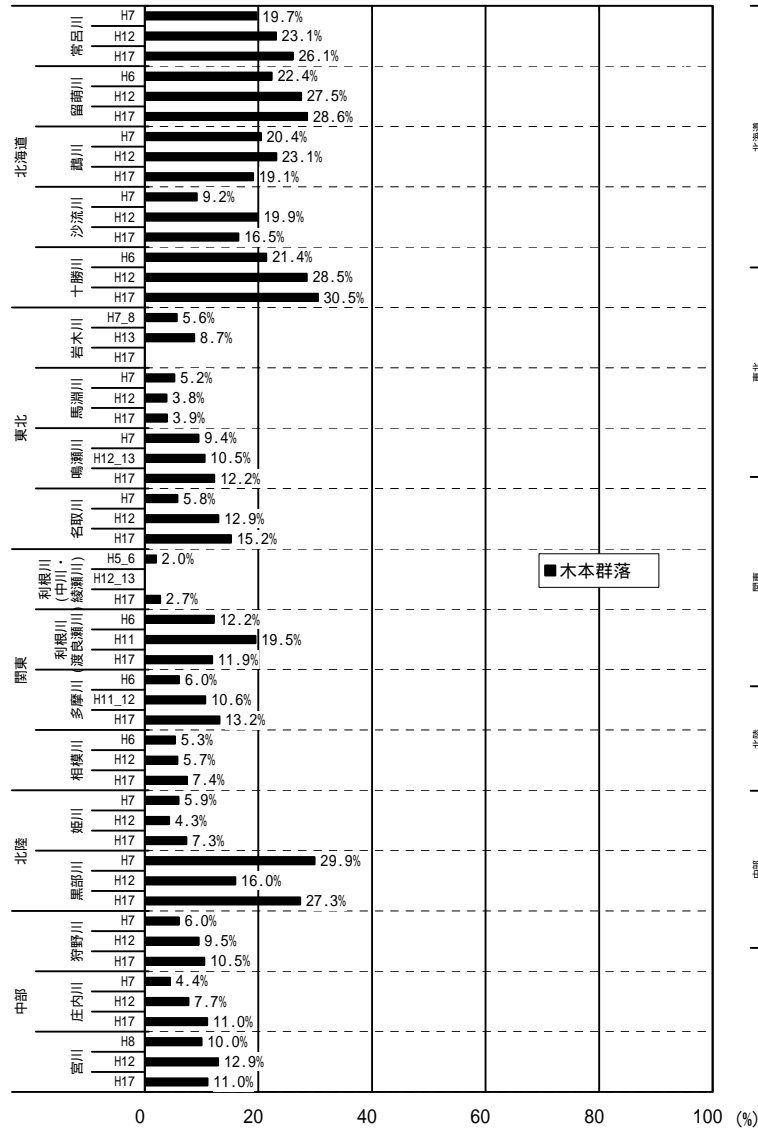
河川敷の変遷 (調査対象面積に対する構成比)



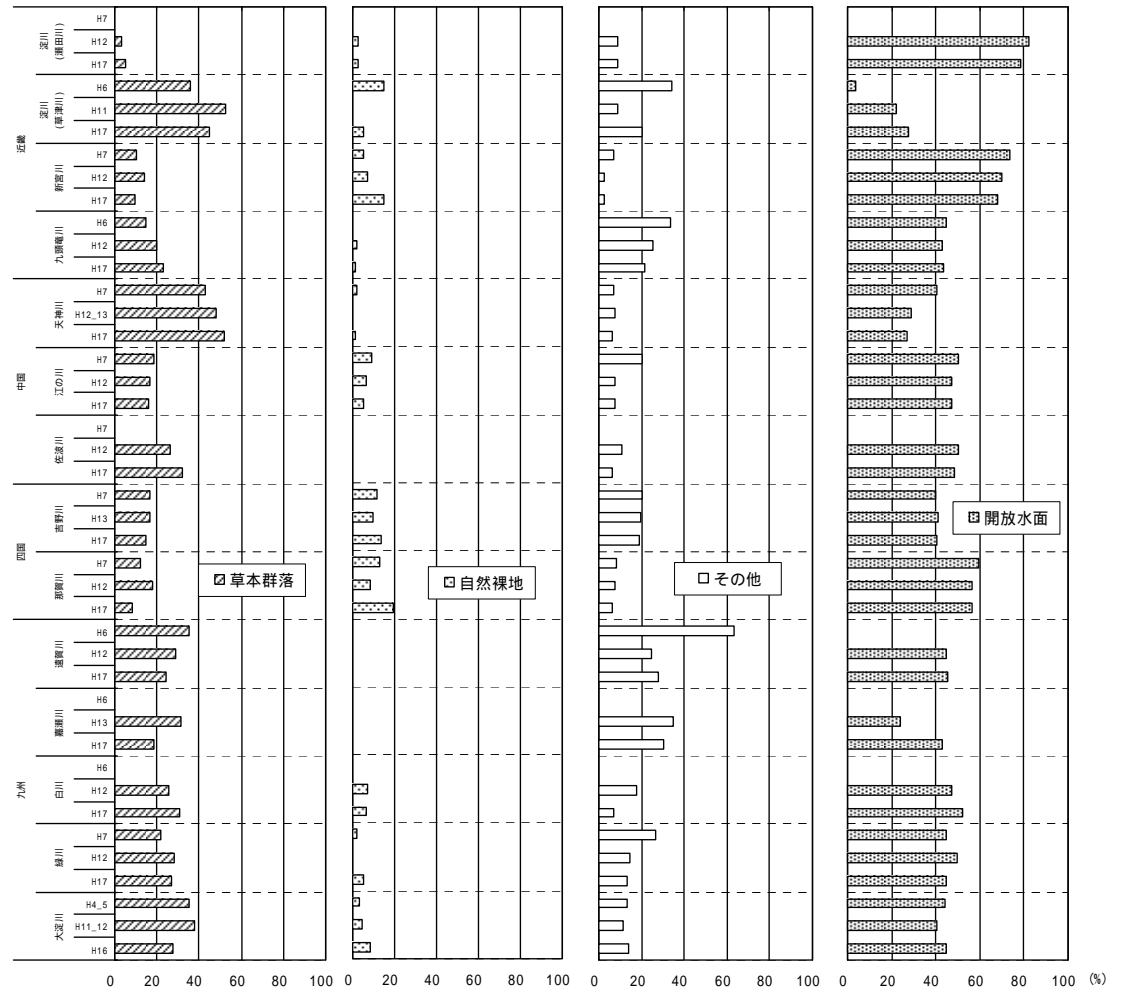
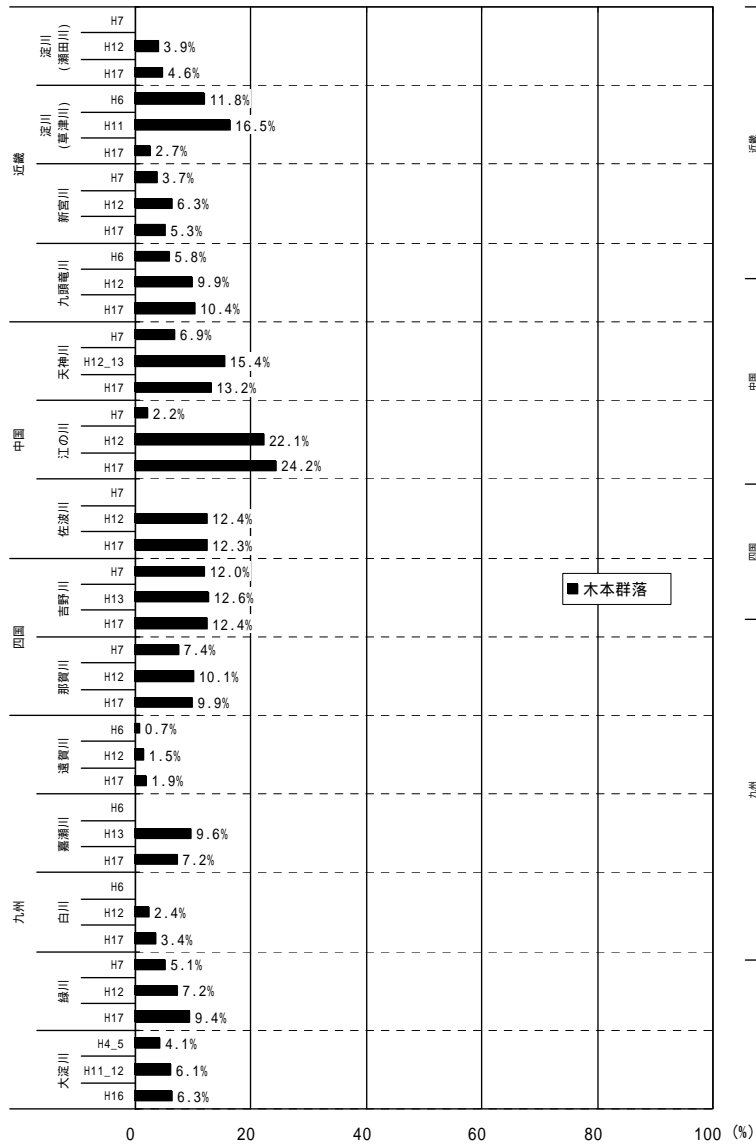
河川敷の変遷 (区分別面積)



河川敷の変遷 (区分別面積)



河川敷の変遷 (区別調査対象面積に対する構成比)



河川敷の変遷 (区分別調査対象面積に対する構成比)

● 自然樹林と、外来種樹林および植林地が共に増加傾向

河畔の樹林を自然樹林と、外来種樹林および植林地に分類し、それぞれの分布面積を整理しました。

今回とりまとめを行った 32 河川のうち、自然樹林と外来種樹林および植林地の調査対象面積に対する構成比が共に増加した河川は 18 河川でした。

(資料掲載: 3-22 ~ 3-25 ページ)

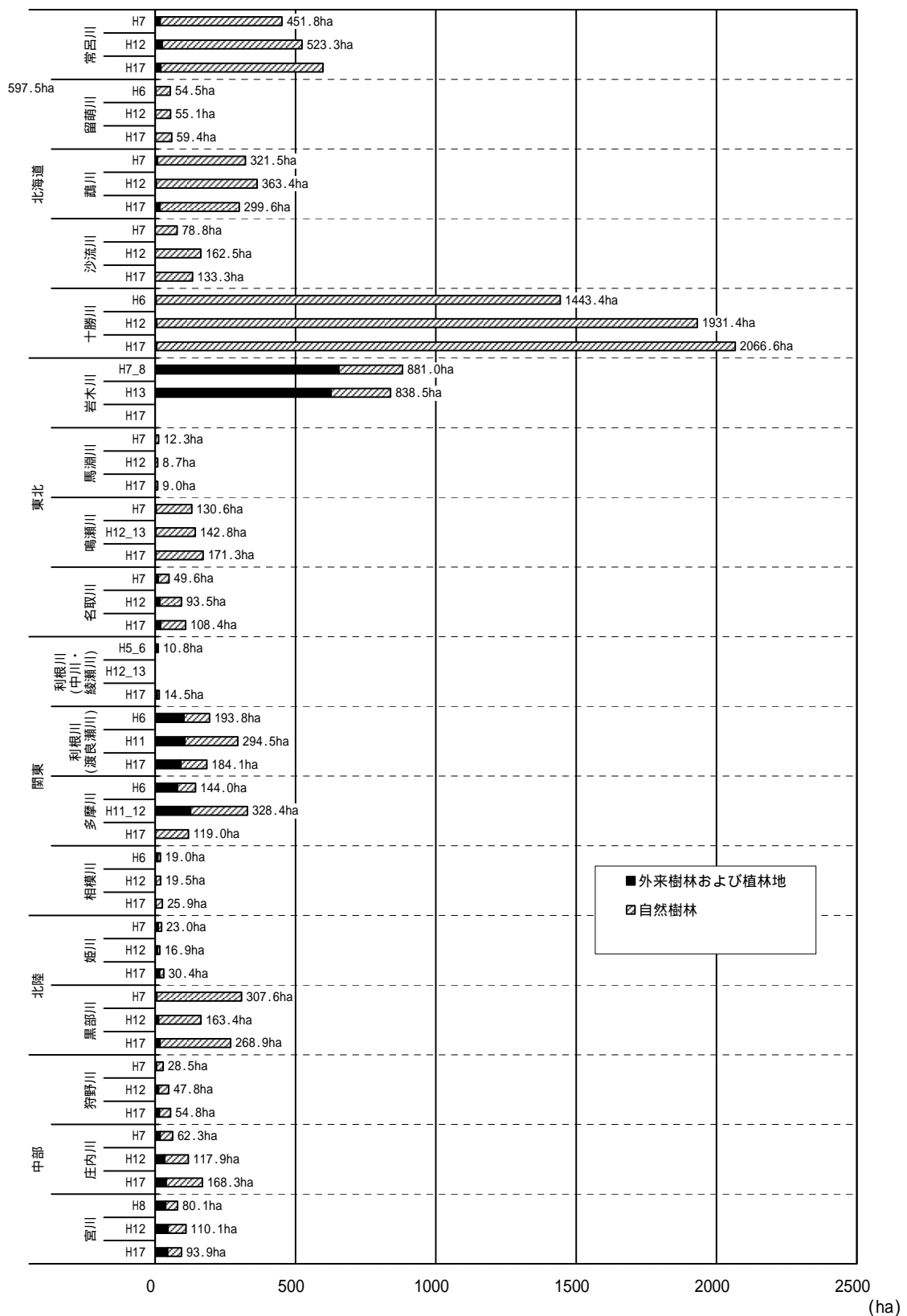
近年、河川敷において植生が著しく繁茂する樹林化の現象が進み、河川管理上の懸案事項となっている箇所が少なくありません。今回とりまとめを行った 32 河川においても、24 河川において樹林化の傾向が確認されました。

ここでは、どのような樹林が増えているのか把握するため、河畔の樹林を自然樹林と外来種樹林および植林地に分類し、それぞれの分布面積を整理しました。自然樹林には、ヤナギ群落やハンノキ群落、カワラハンノキ群落、ムクノキ - エノキ群集、ヤチダモ - ハルニレ群集など本来日本の河川敷に生育する樹林、外来種樹林および植林地には、クロバナエンジュ群落やハリエンジュ群落やスギ・ヒノキ植林など、本来の日本の河川敷にはなかった樹林が含まれます。

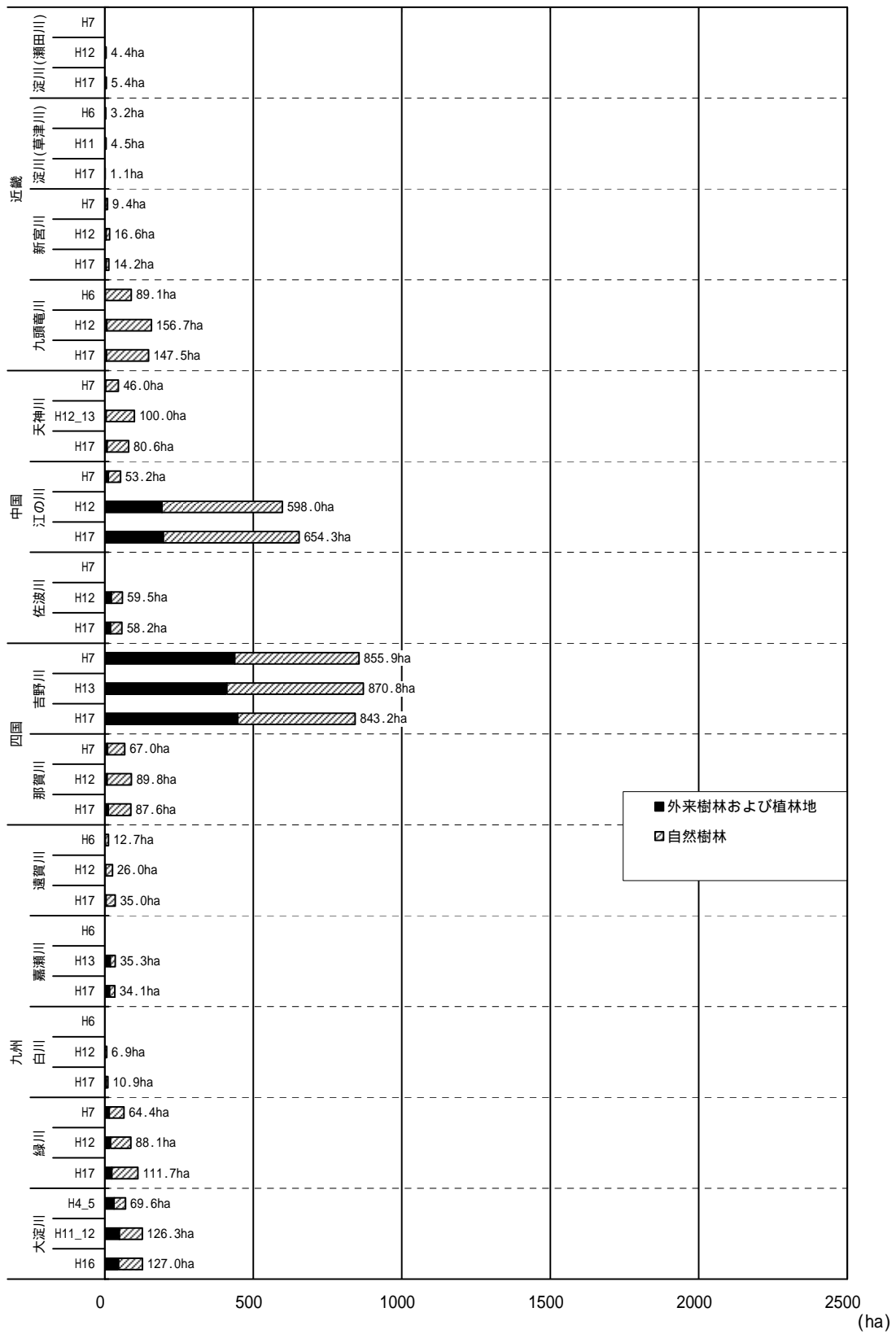
今回とりまとめを行った 32 河川の、前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、自然樹林と外来種樹林および植林地の構成比が共に増加したのは、東北地方の名取川など 18 河川、自然樹林のみが増加したのが東北地方の鳴瀬川など 6 河川、外来種樹林および植林地のみが増加したのは北陸地方の黒部川など 4 河川でした。

河川敷の樹林化には、自然樹林と外来種樹林および植林地の両方が寄与していることが伺われます。

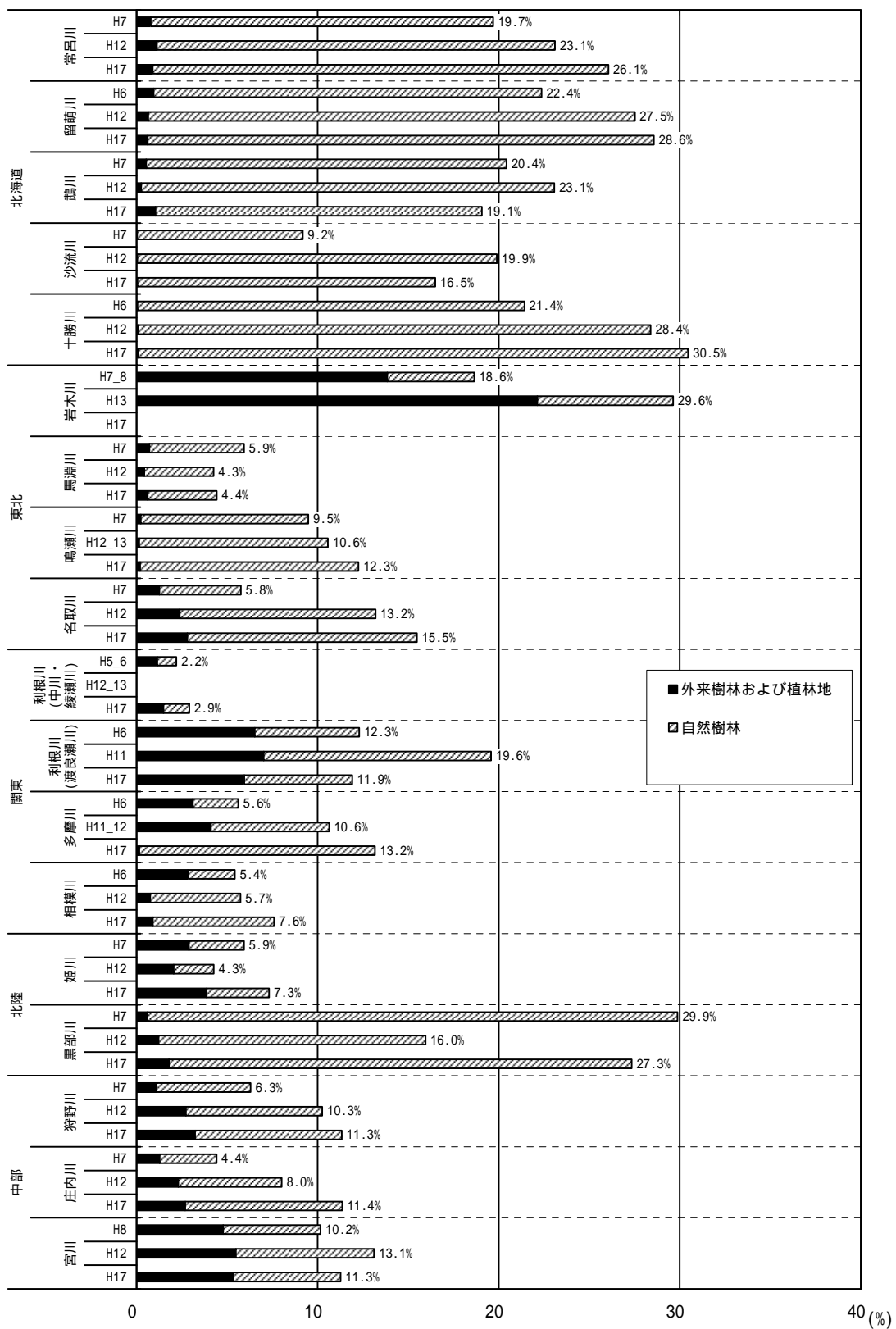
調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前々回調査から今回調査にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲（距離）の調整を図っている。



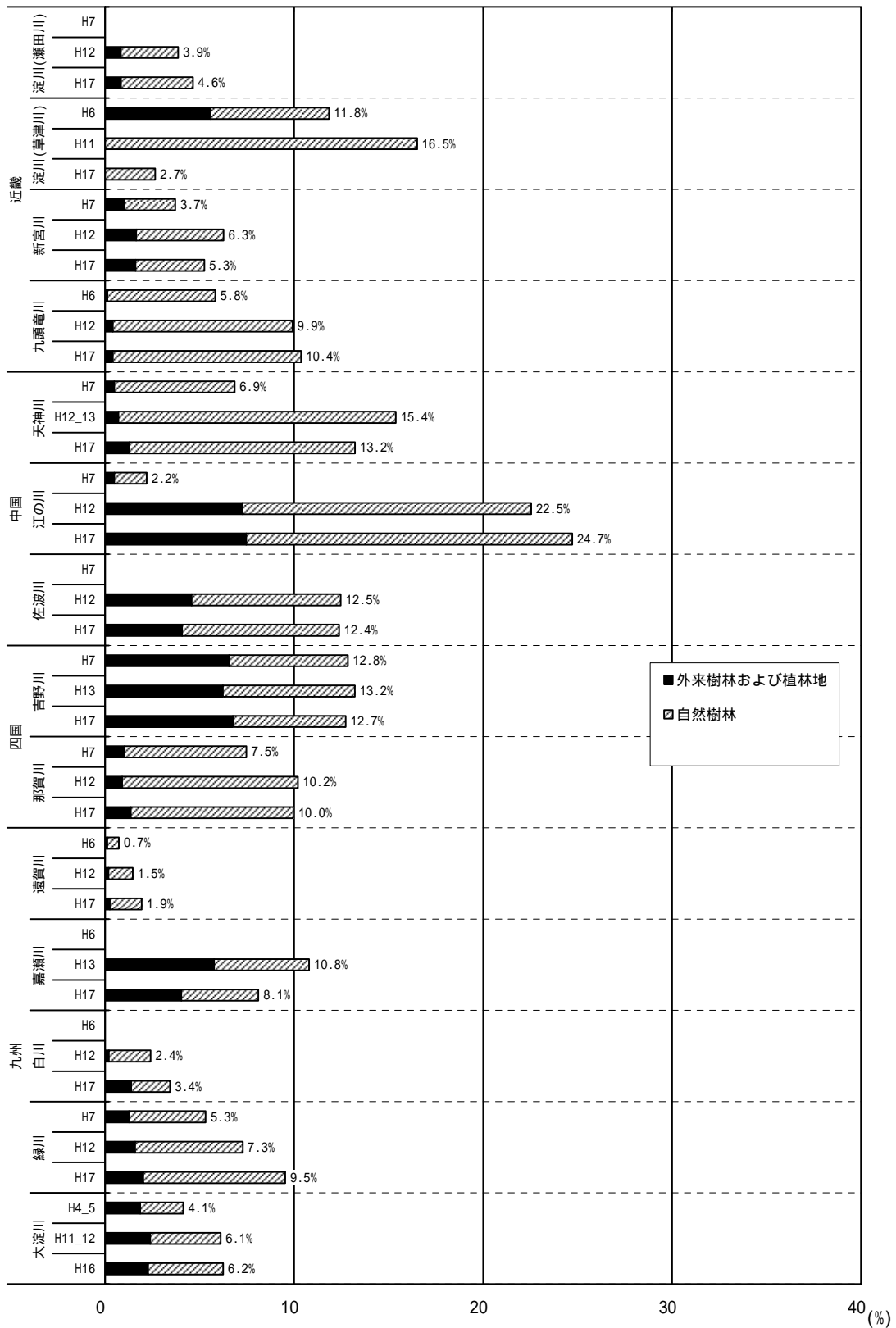
樹林の分布面積の変遷 (面積)



樹林の分布面積の変遷 (面積)



樹林の分布面積の変遷 (調査対象面積に対する構成比)



樹林の分布面積の変遷 (調査対象面積に対する構成比)

- **砂礫河原に生育するカワラヨモギ - カワラハハコ群落**が 11 河川中 7 河川で増加傾向
砂礫河原の指標となる、カワラヨモギ - カワラハハコ群落の分布面積を整理しました。
今回とりまとめを行った 32 河川では、カワラヨモギ - カワラハハコ群落は 11 河川で見られ、北海道地方、中部地方と九州地方では確認されませんでした。
前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると中国地方の江の川など 7 河川で調査対象面積に対する構成比の増加傾向がみられ、近畿地方の九頭竜川など 5 河川で、調査対象面積に対する構成比の減少傾向がみられました。 (資料掲載: 3-27~3-30ページ)

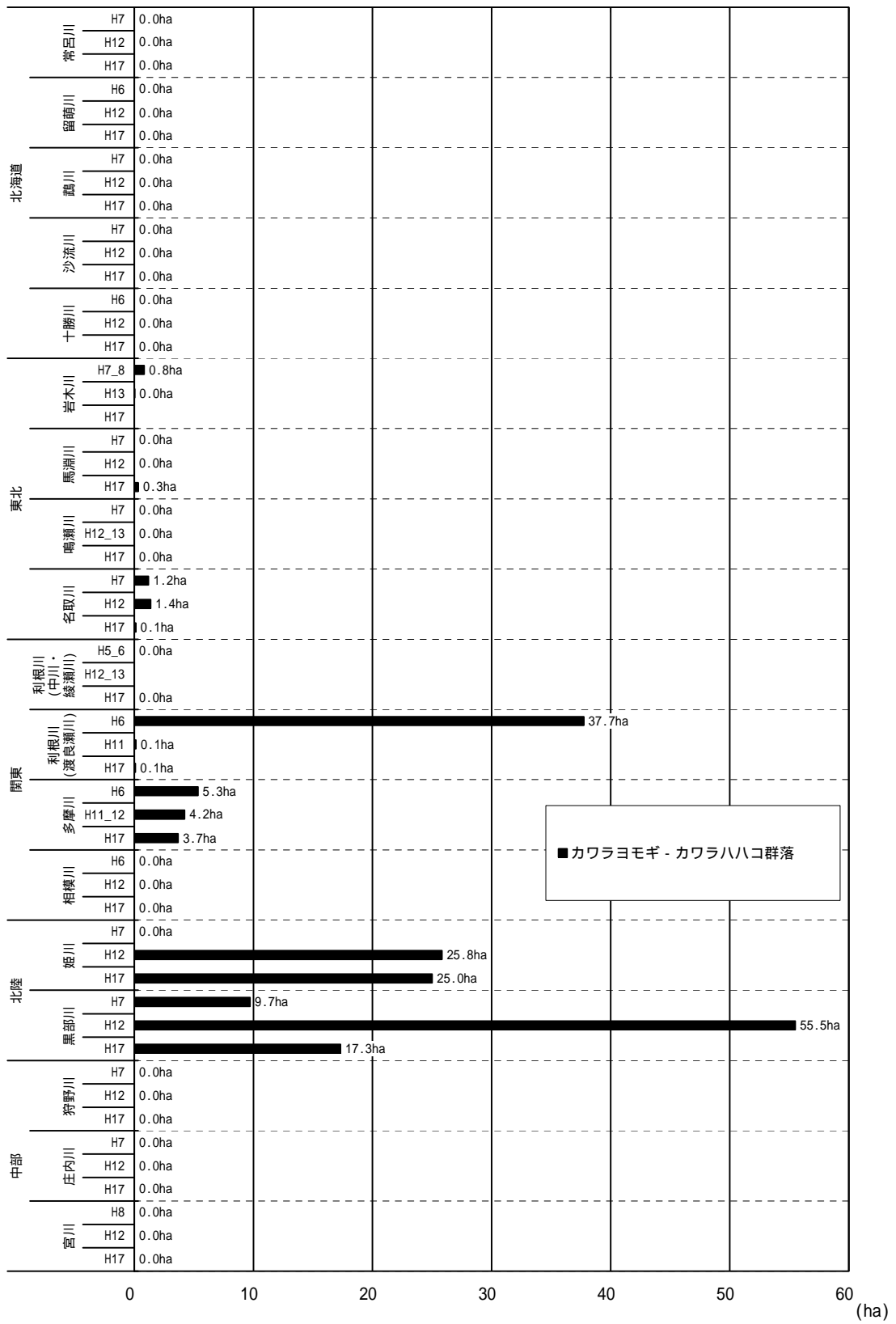
カワラヨモギとカワラハハコは砂礫のある河原に生育するキク科の多年草です。カワラヨモギは本州から沖縄にかけて分布し、カワラハハコは北海道から九州にかけて分布しています。どちらも平時は乾燥し、洪水時には冠水し攪乱を受ける場所に生育するのが特徴です。砂礫河原に生育する植物には、攪乱頻度の減少等により絶滅が危惧される種なども含まれるため、河川環境の特性を把握するための重要な要素の一つと考えられます。

ここでは、砂礫河原の指標となる、カワラヨモギ - カワラハハコ群落の分布面積を整理しました。

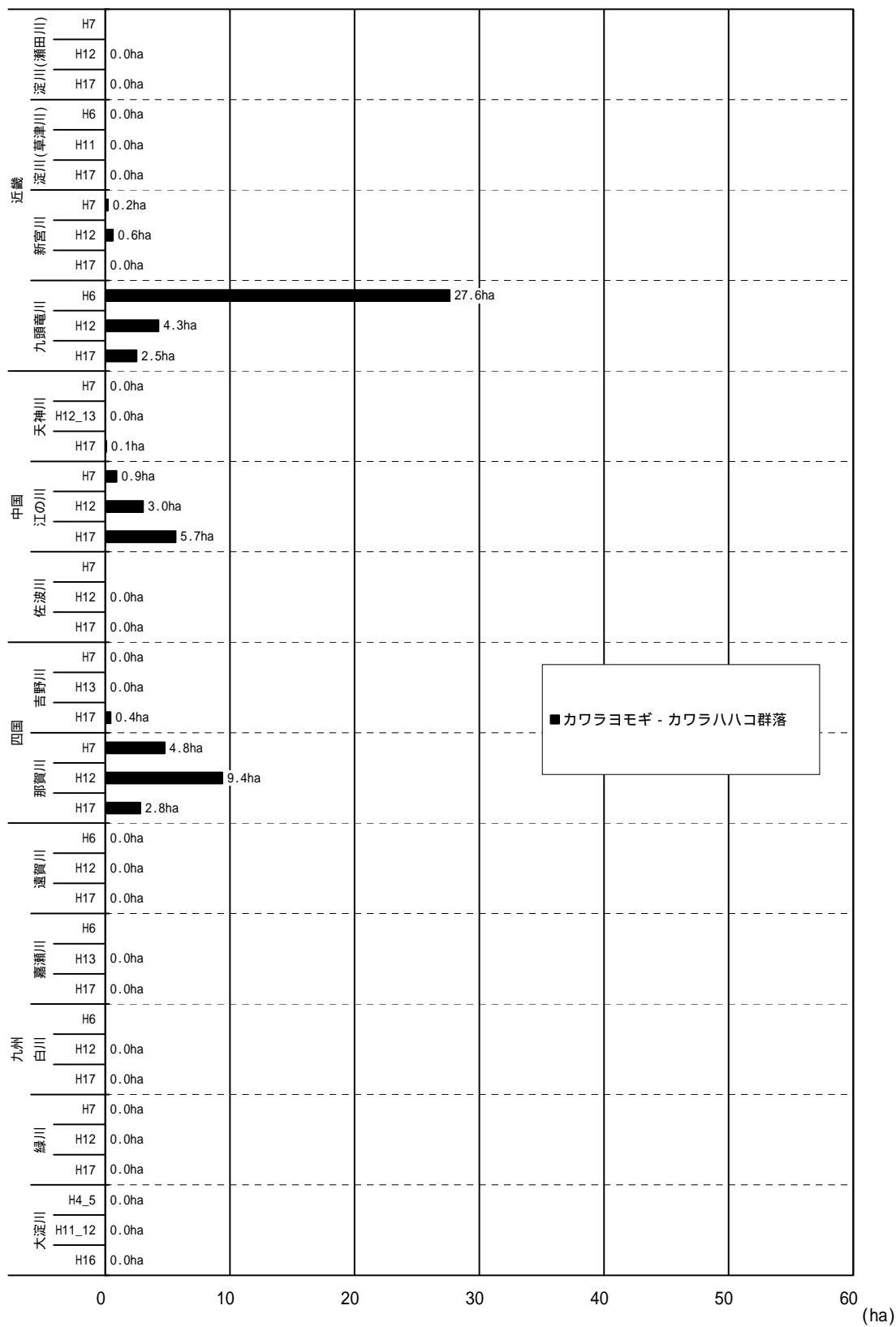
今回とりまとめを行った 32 河川では、カワラヨモギ - カワラハハコ群落は 11 河川で見られ、北海道地方、中部地方と九州地方では確認されませんでした。調査対象面積 に対する構成比が最も高い値を示した河川は、北陸地方の姫川で、6.0%でした。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、カワラヨモギ - カワラハハコ群落が確認された 11 河川のうち、中国地方の江の川など 7 河川で調査対象面積に対する構成比の増加傾向がみられ、近畿地方の九頭竜川など 5 河川で、調査対象面積に対する構成比の減少傾向がみられました。

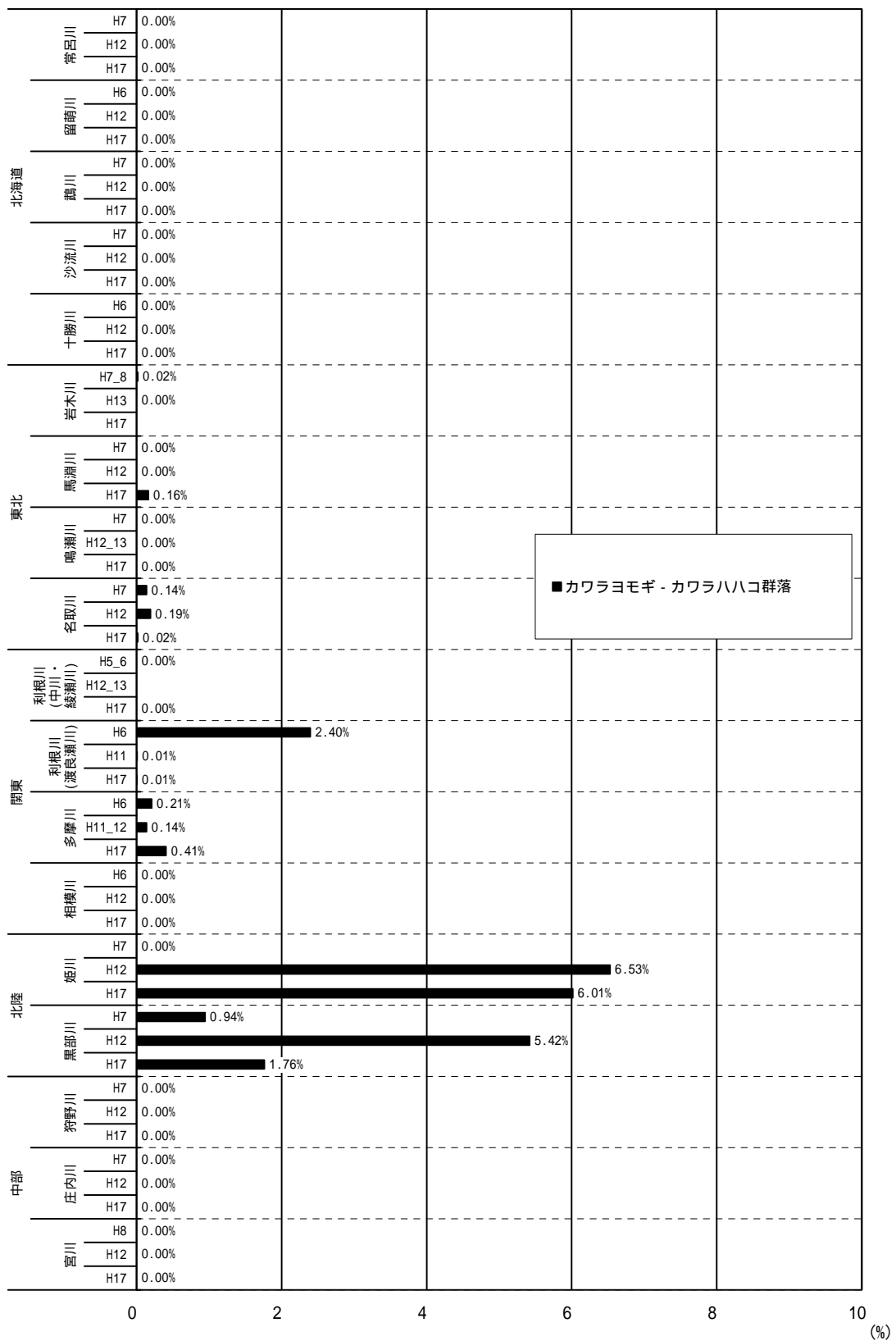
調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前々回調査から今回調査にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲(距離)の調整を図っている。



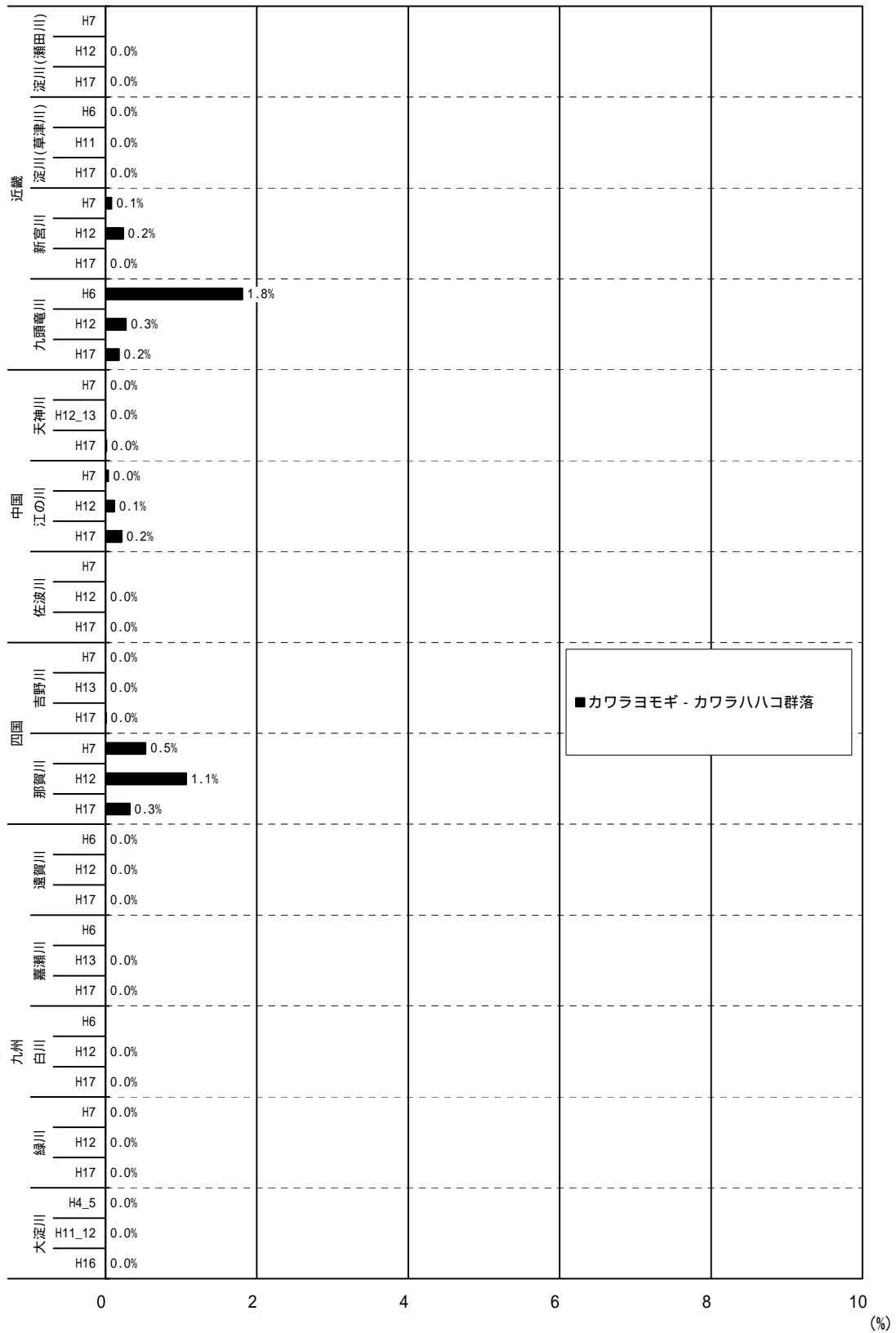
砂礫河原に生育する植物群落の分布面積の変遷 (面積)



砂礫河原に生育する植物群落の分布面積の変遷 (面積)



砂礫河原に生育する植物群落の分布面積の変遷
(調査対象面積に対する構成比)



砂礫河原に生育する植物群落の分布面積の変遷
(調査対象面積に対する構成比)

- 河口域の塩性湿地に生育するシオクグ群集、アイアシ群集が 13 河川中 7 河川で増加傾向

河口域の塩性湿地の指標となる、シオクグ群集、アイアシ群集の分布面積を整理しました。

今回とりまとめを行った 32 河川のうち、シオクグ群集、アイアシ群集が確認された河川は、東北地方の名取川、中部地方の庄内川、九州地方の白川と緑川などの 13 河川でした。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、東北地方の名取川など 7 河川において、調査対象面積に対する構成比の増加傾向がみられました。また、九州地方の白川など 6 河川で減少傾向がみられました。
(資料掲載: 3-32 ~ 3-35 ページ)

シオクグ (カヤツリグサ科) とアイアシ (イネ科) は、河口干潟や塩性湿地に生育する多年草です。シオクグは北海道から沖縄にかけて分布し、アイアシは北海道から九州にかけて分布しています。このような塩性湿地に生育する植物群落は、河口域の汽水環境を把握するための重要な要素の一つであると考えられます。

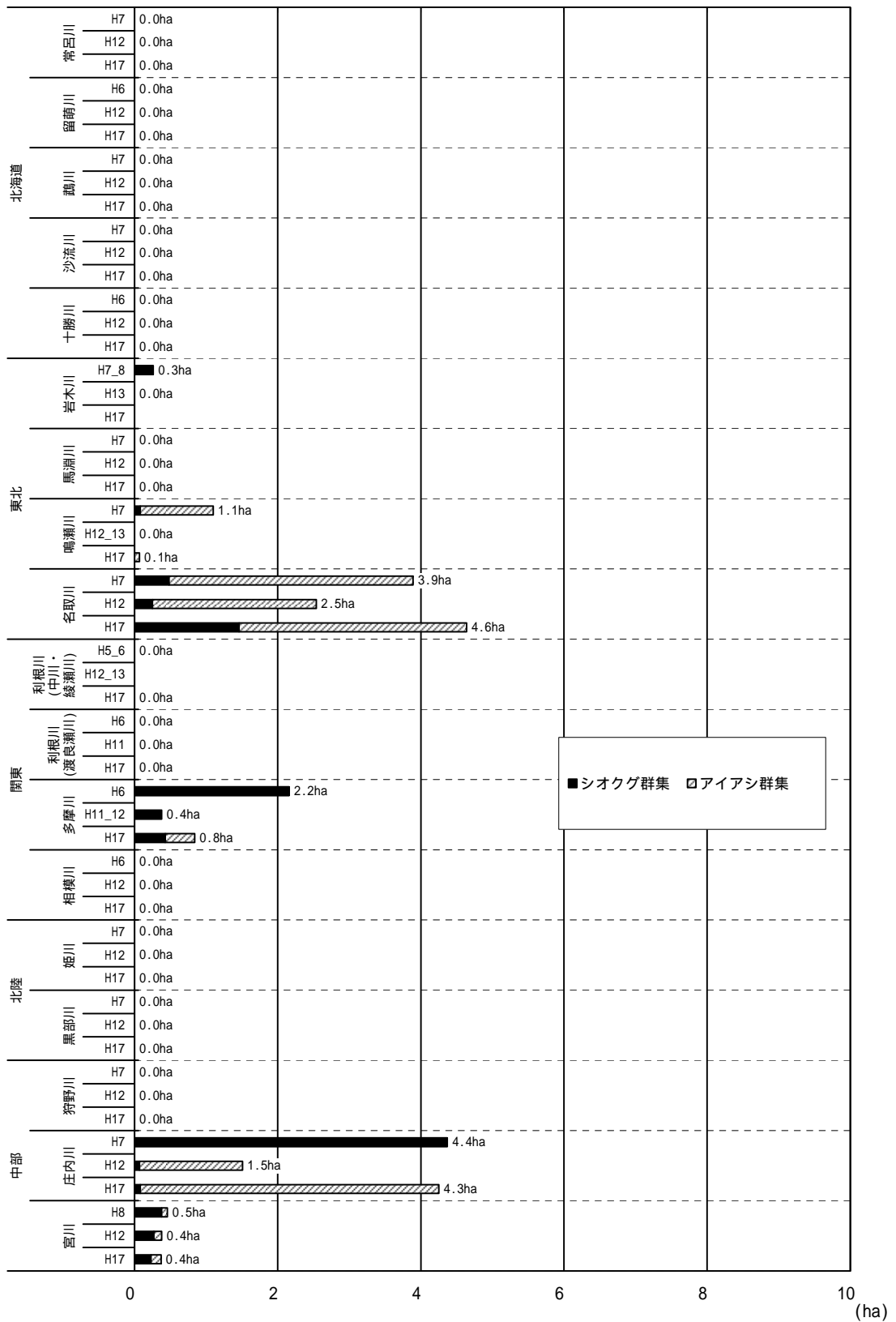
ここでは、河口域の塩性湿地の指標となる、シオクグ群集、アイアシ群集の分布面積を整理しました。

今回とりまとめを行った 32 河川のうち、シオクグ群集、アイアシ群集が確認された河川は、東北地方の名取川、中部地方の庄内川、九州地方の白川と緑川などの 13 河川でした。このうち、調査対象面積 に対する構成比が最も高い値を示した河川は、九州地方の緑川で、0.9%でした。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、東北地方の名取川など 7 河川において、調査対象面積に対する構成比の増加傾向がみられました。また、九州地方の白川など 6 河川で減少傾向がみられました。

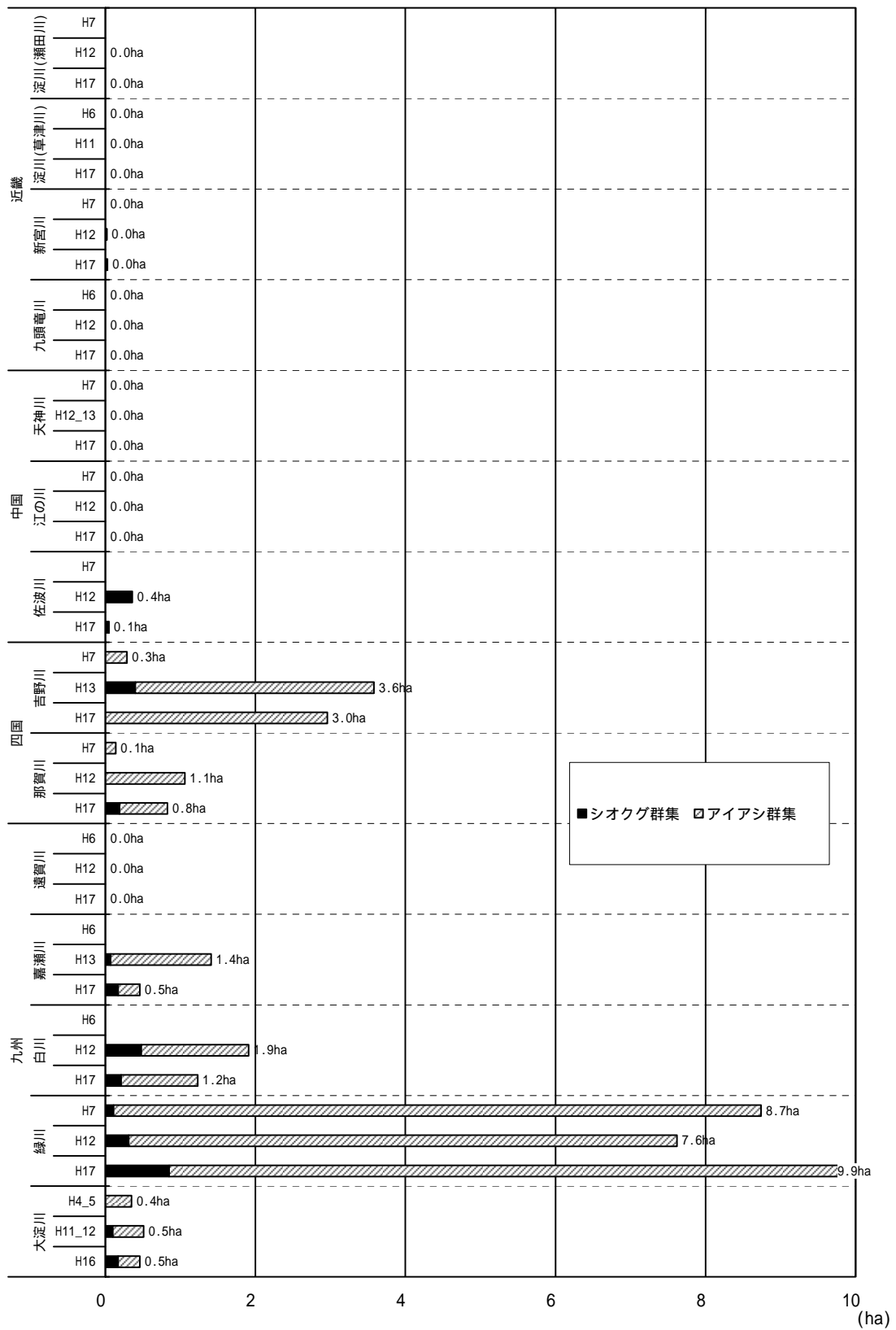
:調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前々回調査から今回調査にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲 (距離) の調整を図っている。

:多摩川 (H6) ではシオクグ群集とアイアシ群集を示すデータが一つにまとめられているため、シオクグ群集として集計した。

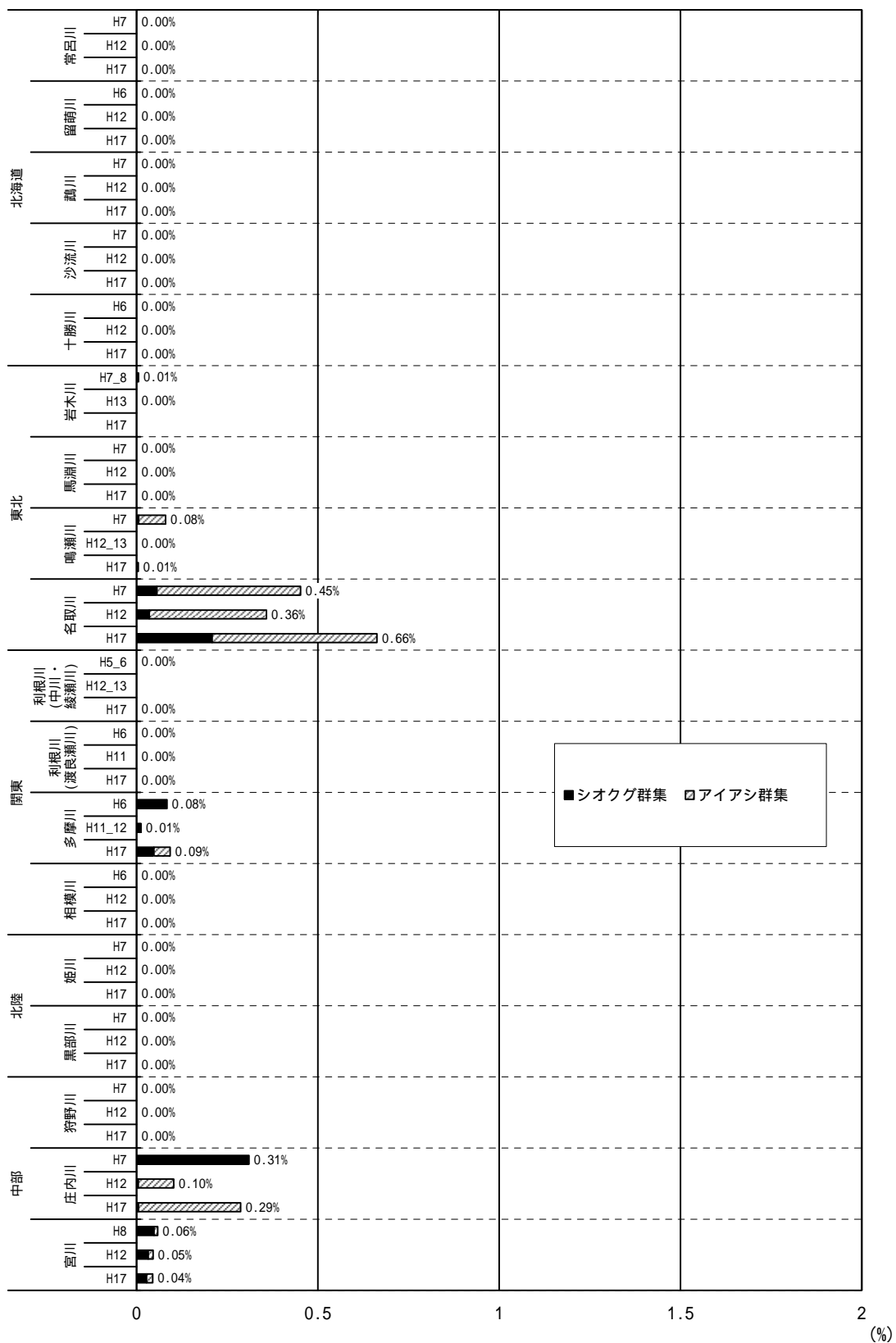


注) 多摩川の H6 年度のデータはシオクグ群集とアイアシ群集を合計したものです。

河口域の塩性湿地に生育する植物群落の分布面積の変遷 (面積)

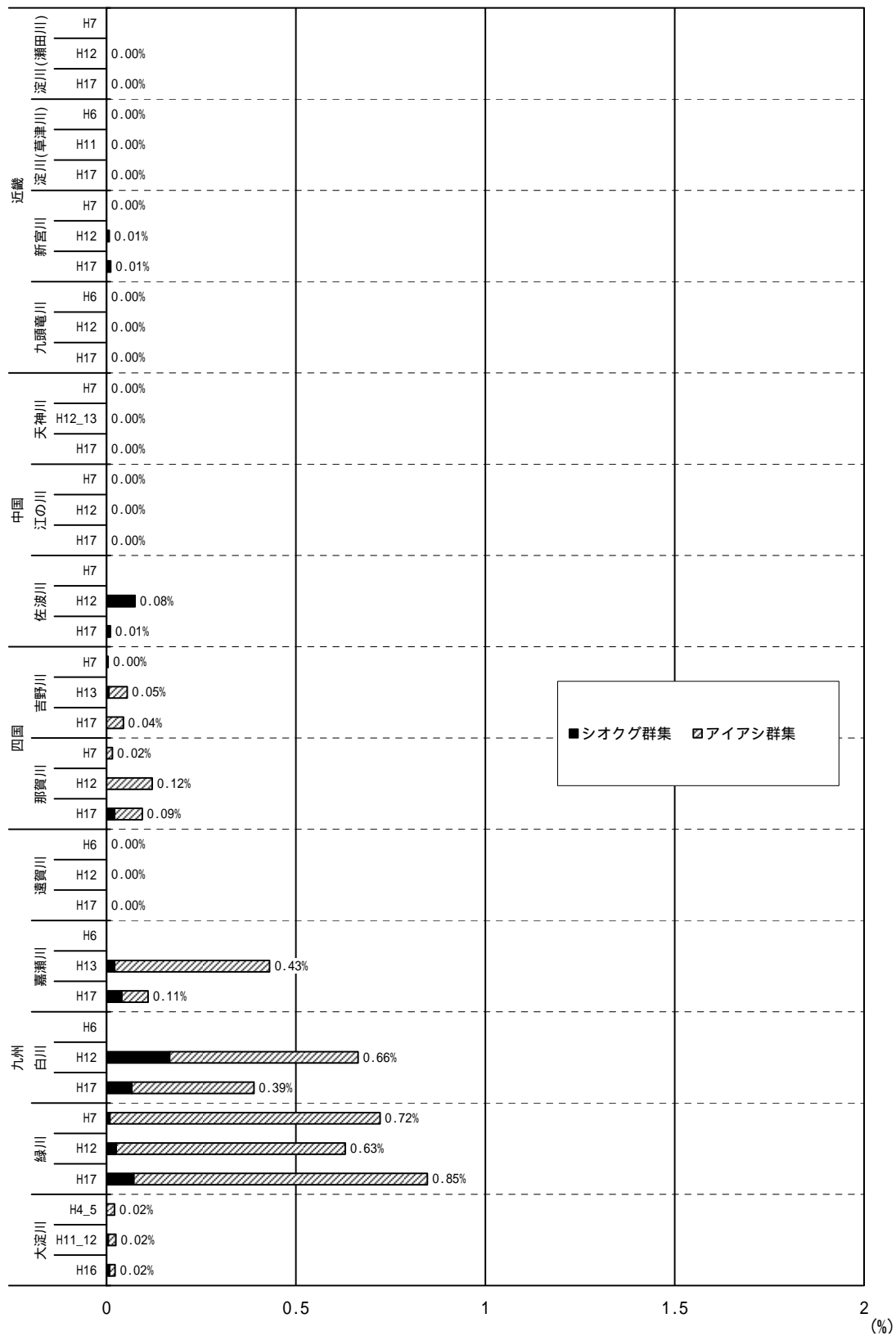


河口域の塩性湿地に生育する植物群落の分布面積の変遷 (面積)



注) 多摩川の H6 年度のデータはシオクゲ群集とアイアシ群集を合計したものです。

河口域の塩性湿地に生育する植物群落の分布面積の変遷
(調査対象面積に対する構成比)



河口域の塩性湿地に生育する植物群落の分布面積の変遷
(調査対象面積に対する構成比)

- **水辺の植物群落が緑川など 15 河川で増加傾向、庄内川など 16 河川で減少傾向**
水辺の植物群落の指標として、ヨシ群落、オギ群落、ツルヨシ群集の分布面積を整理しました。
今回とりまとめを行った 32 河川では、水辺の植物群落の調査対象面積に対する構成比が最も高い値を示した河川は、関東地方の多摩川で、約 38.3%でした。最も低い値を示した河川は、北陸地方の姫川で、約 0.6%でした。
前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、九州地方の緑川など 15 河川でこれらの構成比の増加傾向がみられました。また、中部地方の庄内川など 16 河川で減少傾向がみられました。
(資料掲載: 3-37 ~ 3-40 ページ)

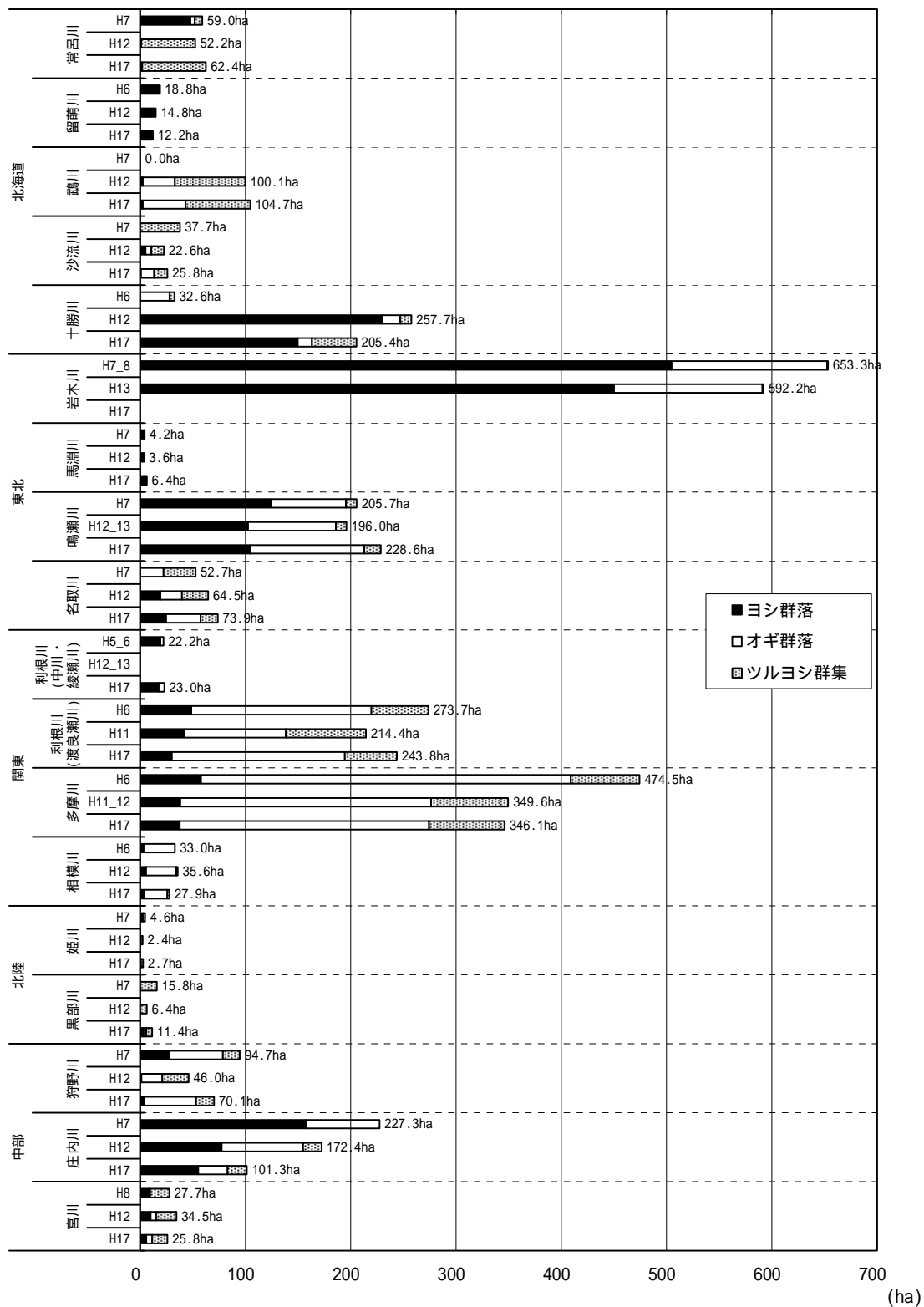
ヨシ、オギ、ツルヨシは、比較的地下水位の高い場所に生育し、河川区域で広くみられるイネ科の多年草です。ヨシとオギは水辺の湿地などに生育し、ツルヨシは川岸や砂礫地などに生育します。ヨシとツルヨシは北海道から沖縄にかけて、オギは北海道から九州にかけて分布しています。このような水辺の植物群落は、河川景観を特徴づける他、昆虫類の食草となったり、オオヨシキリなどの鳥類やカヤネズミの営巣の場として利用されるなど、水辺の動物の生息環境として重要な要素の一つであると考えられます。

ここでは、水辺の植物群落の指標として、ヨシ群落、オギ群落、ツルヨシ群集の分布面積を整理しました。

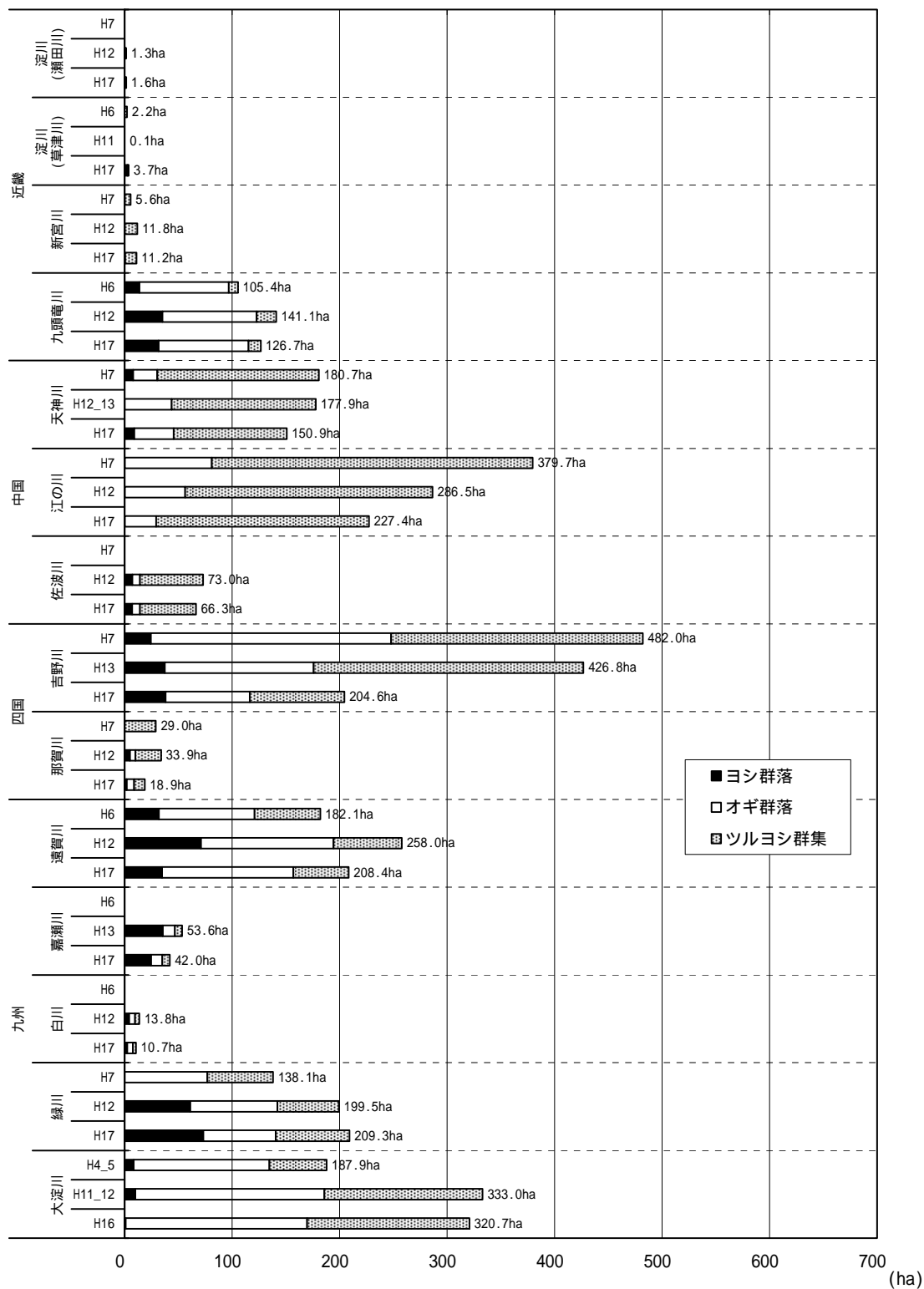
今回とりまとめを行った 32 河川では、水辺の植物群落の調査対象面積 に対する構成比が最も高い値を示した河川は、関東地方の多摩川で、約 38.3%でした。最も低い値を示した河川は、北陸地方の姫川で、約 0.6%でした。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、東北地方の名取川、関東地方の多摩川、九州地方の緑川など 15 河川でこれらの構成比の増加傾向がみられました。また、中部地方の庄内川、中国地方の江の川、九州地方の白川など 16 河川では減少傾向がみられました。

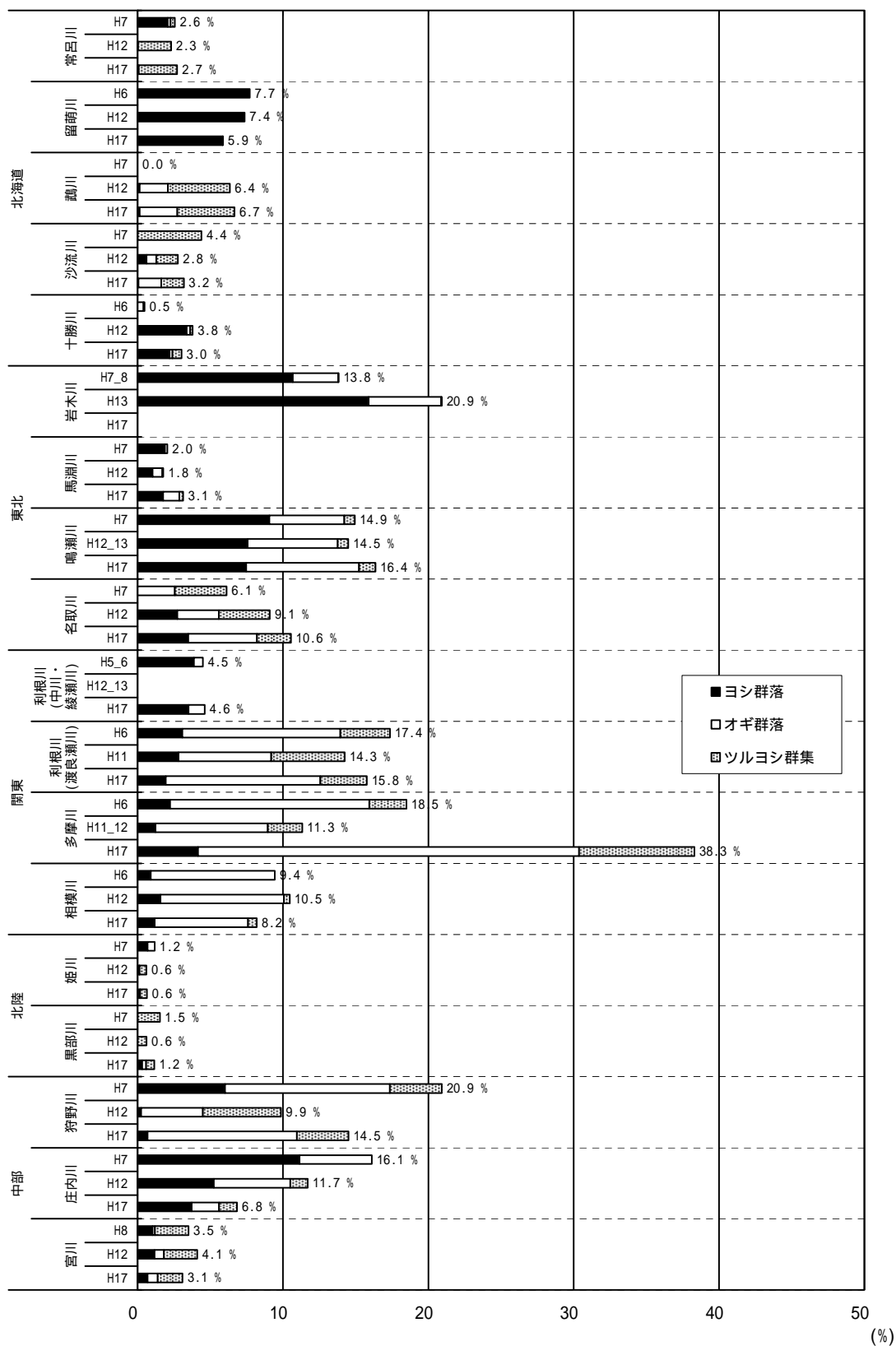
調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前々回調査から今回調査にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲（距離）の調整を図っている。



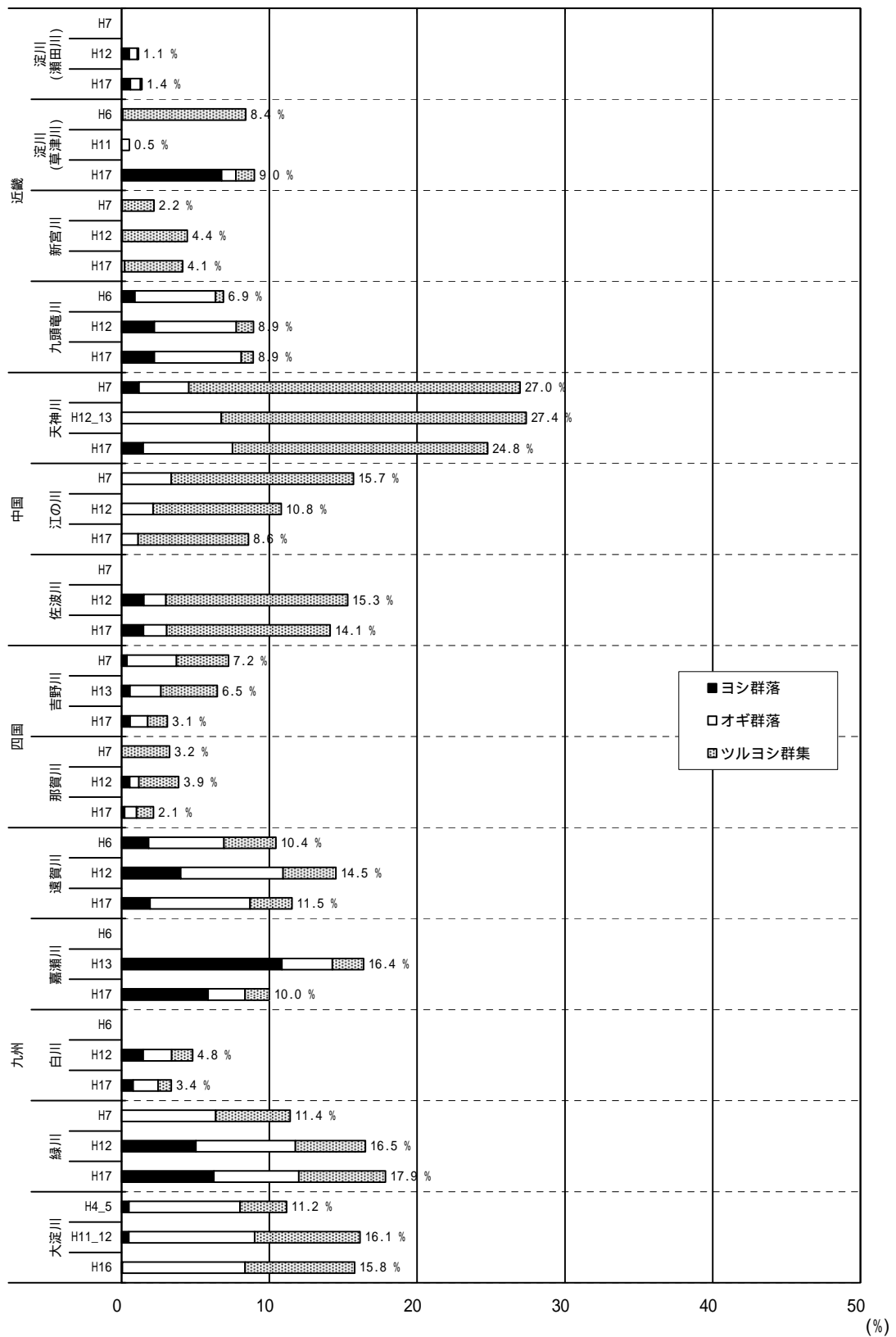
水辺の植物群落の分布面積の変遷 (面積)



水辺の植物群落の分布面積の変遷 (面積)



水辺の植物群落の分布面積の変遷
(調査対象面積に対する構成比)



水辺の植物群落の分布面積の変遷
(調査対象面積に対する構成比)